

定例研究会のご案内

(社) 東洋音楽学会関西支部第 191 回定例研究会 (日本音楽学会と合同)

と き : 1998年11月21日 (土) ①14:00~17:00

と ころ : 大阪大学文学部13教室

〒560-0043 豊中市待兼山1-5 Tel 06-850-5124

交 通 : ①阪急宝塚線「石橋」駅下車徒歩15分

②阪急宝塚線「蛍池」駅下車タクシー5分

③モノレール「柴原」駅下車徒歩10分

14:00~17:00 特別講演 (通訳が付きます)

Marina Roseman (University of Notre Dame)

"Shifting Landscapes: Mediating Modernity in the Malaysian Rainforest"

マリナ・ローズマン氏は、ノートルダム大学準教授。専門は民族音楽学・医療人類学。著書に、*Healing Sounds from the Malaysian Rainforest* (1991)、*The Performance of Healing* (Carol Ladermanとの共編著、1996)、論文に、*Singers of Landscape: Song, History, and Property Rights in the Malaysian Rainforest* (1995)、CDに、*Dream Songs and Healing Sounds* (1995) がある。

Steven Feld (New York University)

"Acoustemology and the Anthropology of Sound Worlds"

スティーブン・フェルド氏は、ニューヨーク大学教授。専門は民族音楽学。現役のジャズ・トロンボーン奏者でもある。著書に、*Sound and Sentiment* (1982/1990) (邦訳『鳥になった少年』平凡社)、*Music Grooves* (Charles Keilとの共著、1994)、*Senses of Places* (Keith Bassoとの共編著、1996)、*Bosavi-English-Tok Pisin Dictionary* (Bambi B. Schieffelinとの共著 1998)、CDに、*Voices of the Rainforest* (1991) がある。



第192回定例研究会 (予告)

第192回定例研究会では、例会後に東大寺二月堂修二会 (お水取り) の見学を企画しております。詳細は次号にてご案内いたしますが、見学には入場整理券を必要とするため、下記の要領で見学申込の受け付けをいたします。なお宿泊については各自でお手配ください。

と き : 1999年3月13日 (土)

と ころ : 14:30~ 奈良教育大学 (定例研究会会場—見学の整理券をお渡しします)

18:00~ 東大寺二月堂 (修二会見学)

(19:00~お松明 19:30~初夜 23:00~走り 1:00~達陀・晨朝)

見学申込 : 葉書にて今期関西支部事務局 (奈良教育大学久保田研究室) 宛てに、
11月30日 (月) までお申し込み下さい。

定例研究会記録

▶第189回定例研究会特別講演報告<

Literacy, Church, Government, Media: New Agents for the Transmission of Music?

ドン・ナイルズ (国立パプアニューギニア研究所、広島大学客員教授)

報告 田井竜一

講演者のドン・ナイルズ氏は現在、国立パプアニューギニア研究所 (IPNGS) の音楽部門の責任者であり、パプアニューギニア (以下、PNG と略) における、「伝統的」なものからポピュラー音楽までのあらゆる音楽芸術についての、長年にわたる収集・調査・研究活動でよく知られている。氏は、広島大学の山田陽一氏の斡旋により、同大学院国際協力研究科の客員教授として、今年の12月以来1年間の予定で日本に滞在されている。

今回の講演は、大阪芸術大学の瀬山徹氏のコーディネートにより同大音楽学科での特別講義²⁾のため氏が来阪されたのを機に、日本ポピュラー音楽学会との合同研究例会という形で開催された。当日はあいにくの雨であったが、両学会をあわせて約20名程の出席者があり、熱心に講演にききいった。かくいう筆者も、岡山からはせさんじた1人である。多様な文化をもつ PNG における、音楽芸術の伝承の新たな傾向に関する今回の講演は、英文原稿を配布する形で英語により約1時間にわたっておこなわれた。そして、休憩をはさんで約2時間の質疑応答 (瀬山氏による日本語の要約付き) がそれにひきつづいた。ここでは、講演の要旨をおさえつつ、筆者のコメントをまじえて報告したい。

まず第1のトピックは、基本的には口頭伝承で音楽芸術が伝承されてきた PNG において、歌詞をかきとめたものが、他の集団から「購入」した歌の習得をはやめたり、新しい歌の創造のためのアイデアをえることに寄与しているというものであった。口頭伝承に対してリテラシーのもたらす意味合いは、他の地域をかんがえる際にも参考になるとおもわれた。

第2に、現在 PNG をふくめオセアニア地域の多くの人々が信者であるキリスト教会には、一般的に音楽芸術をはじめとしたオセアニアの伝統文化の「破壊者」というイメージがあるが、必ずしもそうではなくむしろ逆の場合もあることが提示された。たとえば PNG のルーテル教会においては、今世紀初頭から、欧米系讃美歌を布教地の言語に翻訳した歌詞でうたうという元々のやり方にくわえて、旋律にも PNG のものを使用することがおこなわれてきている。そして、今日においてはほとんどの讃美歌が PNG の旋律にもとづくものであるばかりか、伝統的な楽器や舞踊も採用されているという。これはまさに、讃美歌の「現地化」といえよう。さらに、ルーテル教会の布教地においては、男性の秘密結社などは消滅してしまっているにもかかわらず、伝統的な音楽芸術がかなり伝承されているとのことである。伝統的な音楽芸術を脱文脈化し、キリスト教会というあらたな文脈にくみこんだ形で伝承が継続された実例として興味深いものであった。キリスト教会の伝統音楽への対応の在り方については質疑応答でも話題となったが、筆者は宗派 (カトリック、英国国教会、プロテスタント各派) によって、伝統音楽への対応や讃美歌の「現地化」の在り方も異なるのではないかとおもった。オセアニア各地の各宗派の対応について詳細に調査し、比較考察することは興味深いテーマとなろう。

第3のトピックである行政との関わりで氏が指摘したのは、伝統的な音楽芸術への関心とその再評価に貢献しているのが、学校教育もさることながら、行政や企業が主催する伝統的な舞踊の競技会であるという点であった。氏は後の質疑応答の中で、競技会において「伝統らしさ」が過度に強調されてしまうこと、パフォーマンスがスペクタクルなものになる傾向があること、賞金を獲得することに人々が熱中してし

まうことが多いことを指摘された上で、競技会が人々（特に若い世代）に伝統的な音楽芸能にふれ、それに対して誇りをもつ重要な機会となっていることを強調されていた。

第4に、氏は音楽芸能の新しい媒体として、ラジオ放送とカセットテープに重要性について言及された。前者に関しては、質疑応答において、番組編成における音楽ジャンルの割合についての質問があり、それによると英語圏のポピュラー音楽（ロック、ジャズ、レゲエなど）がかなり多いとのことであった。しかしながらラジオ放送が、ギターなどの弦楽器を中心としたストリングバンドや電子楽器を中心としたパワーバンドなどの、いわゆるローカル・ミュージックの流布に少なからず貢献していることは確かな様である。一方、氏によると現在 PNG では自国のポピュラー音楽のカセットテープが約 4,000 種も刊行されているといい、カセットテープがまさにメディアの中心になっているといえよう。それに対して、CD は録音ができないという理由でほとんど普及していないそうである。これに関しておもしろくおもったのは、ラジオ放送や重要な儀礼における音楽芸能を記念として録音することが、村落において近年盛んになってきたことである。これなども、新しい形の「伝承」の在り方ということができるかもしれない。

以上の講演に対して質疑応答では、前述したものの他に、PNG の教育機関、行政の文化政策とその音楽芸能に対する影響、PNG における音楽芸能の記録・保存活動、記録・保存活動と宗教的タブー、地元の人々自らの録音を記録・保存活動に活用する可能性等についてが議論された。いずれにしても氏の講演は、激しい社会変化の直中にある地域における音楽芸能の伝承について、様々の興味深い枠組み・事例を提供してくれたばかりではなく、現代から未来にかけての音楽芸能の伝承の在り方を、世界的地平で考察する際の知見をもたらしてくれた様におもわれた。

今回の講演の実現に尽力された瀬山氏と、きめの細かい設営・進行をしてくださった国立民族学博物館の福岡正太氏の両氏に感謝すると共に、当日の夕方、千里中央の居酒屋で、参加者の多くがナイルズ氏をかこんで和やかな一時をもったことをしるして、この報告をおわることにしたい。

注) 大阪芸術大学大音楽学科での「特別講義」のテキスト（英文・日本語文）は、瀬山氏のホームページに掲載されているので、参照されたい。URL は下記の通り。

<http://www.asahi-net.or.jp/~cq5t-sym/niles.html>

研究活動コース

研究会の紹介：国際日本文化研究センター共同研究会「日本の語り物—口頭性・構造・意義」続報
(研究代表：時田アリソン)

本研究会について支部だより32号に紹介いたしました。4回目の研究会が以下のように開催されます。

日 時： 平成10年11月13日（金）～14日（土）

場 所： 国際日本文化研究センター 第5共同研究室

テーマ：「語り物の構造」

11月13日（金）

13:00 コーヒーを飲みながら談話

13:30 「語り物の音楽構造を考えるための用語について(中世語り物を中心に)」 薦田治子（東京芸術大学）

「講式の音楽構造」

澤田篤子（大阪教育大学）

「能と幸若の音楽構造」

蒲生美津子（沖縄県立芸術大学）

ディスカッション： 「中世の語り物の構造の特徴」

16:00 「義太夫節の音楽構造」

山田智恵子 (大阪音楽大学)

ディスカッション: 「近世の語り物の構造」

「語り物の構造モデル」

時田アリソン (日文研)

11月14日 (土)

10:00 「三味線音楽への新しいアプローチ—計算機を用いた分析の可能性」

矢向正人 (九州工業芸術大学) コメンテーター: 山田奨治 (日文研)

13:00 「『平家物語』のナラトロジー—覚一本を中心に」

マイケル・ワトソン (明治学院大学)

本研究会に興味のある方は、下記までお問い合わせ下さい。若干名の出席は可能です。

〒610-1192 京都市西京区御陵大枝山町3-2 国際日本文化研究センター 時田 アリソン

Tel: 075 - 335 - 2132 Fax: 075 - 335 - 2090

<http://www.nichibun.ac.jp/tokita/mokuji.html>

関西支部からのお知らせ

入会申込方法・住所等の変更について 入会ご希望の方は、郵便切手80円を同封し、下記の学会本部新事務所に入会申込用紙・入会案内をご請求下さい。なお入会には推薦者1名(本学会員)を必要とします。住所等の変更につきましても同事務所までお知らせ下さい。

〒110-0001 東京都台東区谷中 5-9-25 第2八光ハウス201号 (社) 東洋音楽学会

☎ 03-3823-5173 FAX 03-3823-5174 ☒ LDT01776@niftyserve.or.jp

振替 東京 00160-6-55723

定例研究会発表申込方法・支部だよりについて 今期の役員が企画する定例研究会は本号ご案内の第191回定例研究会で終了となり、192回以降は次期役員担当となります。研究発表等の応募につきましては、11月頃までは下記までにお申し込み下さい。申込の際は、発表の種別(連続講座、研究発表、資料紹介、研究演奏、調査報告など)、題目、使用機器、発表希望日、所属、氏名、連絡先を明記の上、下記宛にご送付ください。また支部だよりへのご意見や自由な投稿もお待ちしています。

〒582-0026 大阪府柏原市旭ヶ丘4丁目698番1 大阪教育大学 澤田篤子

Tel & FAX 0729-78-3703

☒ fwid5652@mb.infoweb.ne.jp

お詫びと訂正 支部だより32号1ページに誤りがありました。お詫び申し上げますと共に、以下のように訂正していただきますようお願い申し上げます。

(社) 東洋音楽学会関西支部第200回定例研究会 → (社) 東洋音楽学会関西支部第190回定例研究会

編集室より

今期スタッフによる最後の「支部だより」をお届けいたします。慣れない仕事で、毎号のように誤りがありましたこと、またお寄せ頂いた原稿を紙面の都合で小さな文字にしてしまい読みづらい点がありましたこと、心よりお詫びいたします。2年間ありがとうございました。(村上・澤田)